

## I NIHU 北東アジア地域研究シンポジウム開催

今年1月27・28日両日に、シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」が富山大学において開催されました。このシンポジウムは、人間文化研究機構北東アジア地域研究事業の富山大学拠点（極東地域研究センター）、北海道大学拠点（スラブ・ユーラシア研究センター）、東北大学拠点（東北アジア研究センター）の合同主催であると同時に、北東アジア学会連携によるシンポジウムとなりました。

北東アジア学会連携企画セッションの「ロシアと朝鮮半島問題」では、北朝鮮半島問題にどのようにロシアが関与し、今後どのような関与が想定できるかが議論されました。北大・富大拠点企画セッション「朝鮮半島問題に対する多角的視座」では、北朝鮮の非核化問題、脱北者問題、市場経済化問題など、文字通り、多角的視座から朝鮮半島問題に切り込むセッションとなりました。北大拠点企画セッション「中露国境地域の新たな可能性」では、中露国境地域に焦点をあてたボーダースタディーズの可能性、中露国境貿易のこれまでと今後の展望に加え、『地球の歩き方』編集者の中村正人氏による中国東北地方21の国境地点についてのお話があり、討論時間の短さを嘆く熱いセッションとなりました。東北大学拠点企画「蒙中露辺境における多民族共生」では、近代モンゴルの漢人、満州国にあった百貨店、20世紀初頭のモンゴルの対露および対中関税を題材に、北東アジアの諸民族が織りなす共生のあり方が論じられました。



写真1. 中村正人氏の報告。

天候の悪い中、研究者、実務者、市民のみならずの参加は私たちの予想を大きく上回る42名ののぼり、多くの関心が寄せられました。ご挨拶いただいた遠藤学長をはじめ、本シンポジウムの実現に尽力いただいた北東アジア学会および各拠点の代表者に御礼申し上げます。

(文責：堀江 典生)

## II 移民の架け橋 10年

平成19年度採択文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」委託研究に取り組んでいたとき、私はロシア科学アカデミー社会政治研究所のセルゲイ・リャザンツェフ所長と組んで、モスクワで働く中央アジアからの労働者へのインタビュー調査を実施した。そのとき、労働移民が故郷のコミュニティにどのような影響を及ぼしているのか、タジキスタンで調査をしたいというのが私たちの共通した思いだった。それが実現し、私たちは2009年にパイロット調査をタジキスタンのソグド州で実施した。こうした調査は現地の人々の協力なしではやっていけない。彼らにも私たちの調査に協力してよかったと思ってもらえるように、現地でコンファレンスを開催した。以来10年間、彼は、「移民の架け橋」と題したプロジェクトを継続し、ロシアだけでなく世界各地でイベントを実施してきた。プロジェクトそのものが世界の移民研究者の架け橋となることを願ったのである。本センターも共催者としてプロジェクトを度々支えてきた。2017年にはコンファレンスを日本に誘致した。

10周年を記念して、2018年に10のコンファレンスを世界各国でやる。リャザンツェフ教授の提案は、私にとって途方もないものだったが、彼は最初のイベント開催地に富山を選んでくれた。3月に富山大学で開催したのは、年度末で予算もなく、小さなワークショップだったが、あり難いことに、タジキスタンの調査で世話になった人も招聘できた。彼は、その後、大小のイベントを重ね、最後に宣言通り10のイベントをモスクワで完結させた。私もそのうち4つのイベントにつきあった。モスクワ国際関係大学で開催された最後のコンファレンスでは、この10年間のプロジェクトの軌跡をたどり、リャザンツェフ所長やタジキスタン代表者からも本センターとの長きにわたる協力関係に謝辞が述べられた。



写真2. リャザンツェフ所長。

今年は、彼の研究所と本センターの交流協定10周年にあたる。交流協定が紙の上だけのものに留まらず、イベントと調査両面で交流を続けてきた。彼の長きにわたる本センターとの「架け橋」としての献身に感謝したい。

(文責：堀江 典生)

### III 極東地域研究センターニューオフィス プロジェクト戦略室

センター事務局は富山大学経済学部棟の1階にあり、現在事務員3人で仕事をしています。経済学部棟は建物自体が古くなっており、事務局内も床や壁の汚れが目立ってきていました。机や棚などの備品も、錆びや汚れが目立ち、立て付けも悪くなっていました。そんな折、教職員から、「立ち寄りやすい、明るい雰囲気のオフィスを作ろう」、「集まった人たちで気軽に話し合いのできるオフィスにしよう」という声が上がりました。そして昨年秋ごろから、事務局をニューオフィスとして改装する「プロジェクト戦略室改革」に取り組み始めました。

まず行ったのは、古くなった棚とパーティションの撤去です。これにより部屋が広く、明るく感じられるようになりました。その後、床全面にカーペットを敷き込みました。この作業は、センター教職員だけでなく、和田先生研究室の学生も含め、多くの方にご協力いただきました。北西向きの部屋ということもあり、雨の日や気温の低い日には足元がひどく冷えていましたが、敷き込み後は快適に過ごせています。机や棚などを新調した際には、備品の整理整頓を行い、改装前より物が少なく、すっきりとした収納が出来ております。もともとパーティションで区切られていた会議スペースは、会議に集中できるよう、レイアウトにもこだわっています。その結果、開放的な空間となり、より活発な議論を行えています。



写真3. 新しくなったオフィス。

年末には事務員全員で、普段の掃除で行き届かない箇所の大掃除をしました。それまでも、汚れを溜めないようこまめに掃除していたものの、室内は少し埃っぽさが残っていました。しかし、大掃除により大幅に解消されました。特に汚れが目立っていた壁や窓際はワントーン明るくなりました。今では、事務局を訪れた方から、「広くなった」、「きれいになった」とのお言葉をいただくようになりました。プロジェクト戦略室改革にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。これからも環境整備に努め、さらに働きやすく、人の集まる居心地の良い事務局を作っていきます。

機会がありましたら、生まれ変わった「極東地域研究センター プロジェクト戦略室」へ是非お立ち寄りください！  
(文責:佐藤 葉月)

### IV UiT ノルウェー北極大学訪問

2018年12月に富山大学の全学協定校であるノルウェー北極大学 (UiT)を訪問する機会がありました。大学名に北極とあることから分かるようにUiTが立地しているトロムソという街は北緯69度で北極圏の中にあります。12月の北極圏というとどれだけ寒いかと想像するかと思いますが、トロムソは港町で海が近いこともあり、私が訪問した時の最低気温はマイナス4度ほどで富山より少し寒いという程度でした。



写真4. UiTの学内にて (午前中に筆者撮影).

滞在中最初の仕事は経済系の学部でのワークショップ参加でした。UiT から2名の研究発表があり、富山大学からは私と経済学部の岩田真一郎先生が発表をしました。それぞれの報告後には非常に熱心な議論が交わされ、有益な時間をすごしました。この和やかで生産的な雰囲気には教室のデザインなども一役買っているのではないかと思います。北欧のイメージと合致すると思いますが、研究棟は大きくはないものの北歐らしいシンプルなデザインで大変美しく仕上げられていました。気のせいかもしれませんが、こういう環境ならいいアイデアがもっと浮かぶんじゃないかなと感じました。その後、理学系の学部でも大学案内のプレゼンテーションや研究報告を行いました。また、インターナショナルオフィスのスタッフとの意見交換もセッティングしていただき、お互いの学生が行き来する場合に問題となる点についても議論することができました。

その一つが物価の高さです。ノルウェーはオイルマネーがあるため、北欧でも最も物価の高い国として知られています。空港でピザとコーラを頼んだら三千円くらいは覚悟しておいた方がいいかもしれません。もう一つの課題はやはり冬の天候です。富山の冬も長く厳しいですが、北極圏ははるかに厳しいです。我々の訪問した時期は昼間に数時間明るくなるものの、太陽そのものを拝むことは一度もできませんでした。1年単位での留学を考えるのであれば、季節による環境の大きな変化に順応できる気持ちの余裕が求められるようです。  
(文責:山本 雅資)

#### 【追記】

前号で研究紹介された宮本舞研究員がこの3月をもって新たな職場に旅立たれます。益々のご活躍をセンター教職員一同祈念しております。